

B R I C s が世界の食料を食い尽くす

～ 現実味を帯びるマルサスが描いた「人口論」の世界～

* 本稿は筆者が週刊エコノミスト(06年7月31日発売号)に寄稿したものです。

2006年8月9日(水)

B R I C s 経済研究所 代表 門倉 貴史

E-mail: postbrics@yahoo.co.jp

～ 要 旨 ～

B R I C s では、人々の生活水準が向上し、様々な食料品に対する需要が急速に高まっている。4カ国に共通する特徴は、購買力のある中産階級の間で、食の西洋化・高級化が進み、欧米諸国と大差のない豊かな食生活を享受するようになってきた点だ。B R I C s の人口は計27.5億人。この人たちの食の西洋化・高級化が進めば、世界の食料の需給バランスに無視できない影響が及ぶ。

シミュレーションの結果、B R I C s の牛肉消費量(トンベース)の世界シェアは、2005年時点では30.5%だったが、2010年には33.5%、2020年には40.0%、2030年には46.8%まで上昇すると推計される。大豆の消費量(トンベース)の世界シェアは、2005年時点では39.9%だったが、2010年には42.5%、2020年には47.8%、そして2030年には52.8%まで上昇するとみられる。また、トウモロコシの消費量(同)の世界シェアは、2005年時点では28.5%だったが、2010年には32.1%、2020年には40.7%、2030年には51.0%まで上昇する。コーヒー生豆消費量(同)の世界シェアは、2005年の17.2%から、2010年には21.3%、2020年には32.1%、そして2030年には47.5%まで上昇する。

こうしたB R I C s の食料需要の世界生産に占めるシェアの上昇は、世界の食料生産の拡大スピードに比べて、B R I C s の食料需要の拡大スピードの方が速いために生じる。B R I C s はこれまで世界の食料品の主要な供給基地だったが、近年では、工業化の進展によって農業用地が縮小傾向にあるうえ、農業の生産性上昇も遅れ気味となっており、海外のみならず国内の需要も十分に賄うことができなくなりつつある。国内の旺盛な食料需要を満たすために、B R I C s 各国は国際市場での買い付けを増やしており、今後そうした傾向はさらに加速していくだろう。

B R I C s の人口は増加を続けるが、アフリカなどで人口が急増するため、B R I C s の人口の世界シェアは、2005年の42.5%から2030年には39.7%まで低下する。その結果、2030年時点では、前述した4品目の食料品需要の世界シェアは人口の世界シェアを大きく上回ることになる。

これは、急成長するB R I C s の消費量が増えることによって、B R I C s と購買力のある先進国を除いた2030年の世界人口の45%が深刻な食料不足に悩まされる危険が生じることを示唆する。18世紀、英国の経済学者マルサスがその著書『人口論』で「人口は幾何級数的に増加するが、食料は算術級数的にしか増加しないため、多くの人が貧困においこまれる」と述べたような悲観的な世界が現実のものになる可能性があるのだ。